ChatGPT

伊予西園寺氏の武将（1476年頃〜1535年頃）西園寺公家の生涯と事績

家系と背景

西園寺公家（さいおんじ　**きみいえ**）は、15世紀後半から16世紀前半に伊予国宇和郡（現在の愛媛県南予地方）で勢力を振るった地方豪族・戦国大名です [1]。西園寺家は藤原北家閑院流に属する公家の名門・西園寺家の庶流であり、中世に伊予国西部を領した一族です [1]。この西園寺氏の祖は、平安時代の公卿・藤原公季（ふじわらのきんすえ）の子孫である西園寺公経（さいおんじ　きんつね）が京都北山に「西園寺」と呼ばれる別業（別荘）を構えたことに始まるとされ、以後「西園寺」を家名としました [2] [3]。鎌倉時代中期の嘉禎2年（1236年）、その公経が幕府に働きかけて伊予国宇和郡の荘園（宇和荘）を獲得して以来、西園寺家は宇和郡に経済的基盤を持ちました [4]。南北朝の動乱期には西園寺一族が現地宇和郡に下向し、宇和郡内の複数箇所（松葉・立間・来村の三か所）に土着しました [5]。当初これら「松葉西園寺」「立間西園寺」「来村西園寺」の三家は対立する局面もありましたが、やがて松葉西園寺家（公家の属する家系）が他の二家を凌いで宇和郡内で主導的地位を占めるようになります [6]。公家はこの松葉西園寺家の当主として生まれた人物です。

生涯

出生と家督　西園寺公家の正確な生年は不詳ですが、文明末期の1470年代半ば（おおよそ文明8年〈1476年〉頃）の生まれと推定されます [7]。父は前代の松葉西園寺家当主・西園寺公季（さいおんじ　きんすえ）と伝えられます。公家は明応・文亀年間（1490年代）までには家督を継承して伊予宇和郡松葉城の城主となり、一族の統率者となったとみられます。彼の時代に、それまで宇和郡内で並立していた立間・来村の西園寺一族を圧倒し、宇和盆地を中心とする地域支配を固めました [6]。公家は本拠地を従来の**松葉城**（宇和郡石野郷松葉山下）から、防御に適した**黒瀬城**（宇和郡黒瀬、現在の西予市宇和町卯之町付近）へ移したとも言われます。黒瀬城への本拠移転は、度重なる外敵の侵攻に備えて水源確保など防衛強化を図る目的で行われたと考えられます [8]。築城者については諸説あり、公家の代に黒瀬城を築いたとする伝承もありますが、一方では息子の実充（後述）が天文年間（1530年代）頃に築城したとも言われています [9] [10]。

伊予での動向　戦国時代初期の伊予南西部では、宇和郡の西園寺氏（松葉西園寺家）と、東隣の喜多郡を本拠とする宇都宮氏という二大国人勢力が並立しており、互いに対立抗争を繰り広げていました [11]。公家の治世下において西園寺氏は一族や配下の土豪をまとめ、宇和郡内で**国人領主**として独自の小勢力圏を築きました [11]。西園寺氏は在地の有力土豪たち（宇和郡の御荘氏・津島氏・河原淵氏・土居氏・北之川氏・法華津氏など）を「殿原衆」として麾下に組織し、その盟主的存在となっていきます [12] [13]。もっとも、この結集は主従の契約が緩やかな同盟関係に近く、内部抗争も絶えない不安定なものでした [13] [14]。こうした中、公家は周辺大名との外交にも腐心します。戦国期の南予では「遠交近攻」の策が取られ、遠方の有力大名と同盟して近隣の敵対勢力に対抗する傾向がありました [15]。西園寺氏も例外ではなく、例えば大永〜天文期（1520年代〜30年代）には周防の大内氏や土佐の一条氏と姻戚・同盟関係を持ち、宿敵の宇都宮氏と対峙しています。天文元年（1532年）当時、豊後の大友義鑑が大内討伐を企図した際には、宇都宮氏が伊予守護の河野氏や瀬戸内水軍の村上氏と結んで協力しており、宇和海の制海権も大友方に握られる状況でした [16]。義鑑から宇都宮氏らに宛てた書状には「宇和表の干戈（宇和方面の戦乱）」に触れる記述もあり、この頃宇和郡では宇都宮氏が大友・河野の後援を受けて西園寺氏より優位に立っていたと考えられます [16]。公家自身の名前が具体的に史料に現れることは多くありませんが、このような情勢の中で西園寺氏当主として宇和郡の防衛にあたり、隣接する宇都宮豊綱らとの小競り合いや領土争いに対処していたものと推測されます。実

際、公家の跡を継いだ子の代には弘治2年（1556年）に宇都宮勢との戦いで嫡男が討死する悲劇も起きており[17]、公家の晩年にもその前哨となる緊張が続いていたとみられます。

中央との関わり　西園寺公家は朝廷や幕府から正式に守護大名に任命されたわけではなく、一介の地方国人領主の立場でした。しかし、公家の代には西園寺氏一門から京都に戻り公卿となった人物もいます。それが**西園寺実宣（さいおんじ　さねのぶ）**で、公家の遠戚にあたる人物です。実宣は明応5年（1496年）に京都の西園寺公藤の子として生まれ、永正17年（1520年）に25歳で一時伊予国へ下向しました[18]。これは戦国期の公家に典型的な**在国**（地方滞在）で、財政確保のため自身の所領である宇和荘の現地に赴いたものと考えられます[18]。実宣は伊予滞在によって西園寺氏一族と交流・協力し、公家の領国経営を支えた可能性があります。その後実宣は天文元年（1532年）に帰京し、翌年から朝廷出仕を再開、天文4年（1535年）に内大臣、天文6年（1537年）に左大臣に昇進するなど中央政界で要職を歴任しました[19]。実宣が京へ戻った翌年の天文2年（1533年）頃が公家の晩年にあたるとみられます。**天文4年（1535年）頃、公家は宇和黒瀬城にて病没した**と伝えられ、享年はおよそ60歳前後だったと推定されます[7]。公家の死去により、伊予西園寺氏の当主位は嫡男の実充（さねみつ）が継承しました。

家族・系譜

親族関係　西園寺公家の父は松葉西園寺氏先代当主の**西園寺公季**とされます[20]。母については不明です。公家には弟妹の存在も考えられますが、詳細な記録は残っていません。妻（正室）に関する史料も明らかではありませんが、一族の権威維持のため、公家またはその子らは他の名門と婚姻関係を結びました。たとえば公家の弟と推定される**西園寺公宣（さいおんじ　きんのぶ）**は土佐一条氏当主・一条房家の娘を妻に迎えています[21][22]。一条房家は京都の公家一条家の出身で土佐に下向した公家大名であり、その娘を娶ったことは土佐一条氏との同盟を意味しました。また、公家の娘（あるいは姉妹）と見られる女性が伊予北部の守護・河野氏へ嫁いだとの系譜も伝わります（詳細は不明）。このように西園寺氏は同じ公家出身の一条氏や、伊予の有力国人河野氏などと縁戚関係を結ぶことで、周辺勢力との関係強化を図りました。

子女　西園寺公家には少なくとも二人の男子がいました。長男が**西園寺実充（さいおんじ さねみつ）**で、後に家督を継いで伊予西園寺氏当主となります[23]。次男が前述の公宣（きんのぶ）で、実充の弟にあたります[20]。実充は永正7年（1510年）生まれとされ、公家の没後に家中を率い、居城を松葉城から黒瀬城へ本格的に移して領国経営を行いました[24]。一方の公宣は兄を補佐しつつ、自身の系統（黒瀬西園寺家の庶流）を繁栄させました。公宣の子供たちには、先述の一条氏との間に生まれた**公次（きんつぐ）**、それから**公広（きんひろ）**、**宣久（のぶひさ）**、**黒瀬公義（くろせ　きんよし）**らがいます[25][26]。公家の嫡孫にあたる**西園寺公高（さいおんじ きんたか）**（実充の長男）は天文7年（1538年）に生まれましたが、弘治2年（1556年）に19歳で戦死したため[17]、実充には直系男子が残りませんでした。そこで公宣の子の公広が実充の娘婿・養嗣子となって家督を継ぎ、以後西園寺氏の当主は公広の系統へと引き継がれていきます[27]。公家の血統は実充の娘たちにも受け継がれ、彼女らは周辺の有力者に嫁ぎました。実充の娘の一人「西姫（にしひめ）」は甥の公広の正室となり[28][29]、他の娘たちも勧修寺家や土居氏・吉田氏といった公家・在地領主に嫁いでいます[30][23]。このように公家の子女は婚姻を通じて西園寺氏の勢力維持に貢献しました。

伊予での政治・軍事的関与

宇和郡支配の確立　公家の当主期、宇和西園寺氏は宇和盆地一帯に強い影響力を持ちました。宇和盆地は山間に囲まれた南予地域で唯一と言ってよい大きな平野で、水田地帯でもあります[31]。戦国期には「米こそ富の象徴」とされたため、この宇和盆地を掌握することが地域での優位性を意味しました[31]。公家は石野郷松葉山下の松葉城（松葉殿）を本拠としつつ、周辺の国人・土豪を被官（家臣）として組織下に収めました[12]。被官となった土豪には、御荘氏（宇和島市三間町御庄）、津島氏（宇和島市津島町）、河原淵氏（西予市宇和町）、北之川氏（鬼北町北川）、法華津氏（八幡浜市保内町）など宇和郡内外の有力者が含まれます[32]。彼らは元来それぞれ独自の系譜と領地を誇り、互いに寸土を争っていた存在でしたが、西園寺氏（公家）の権威に頼って内紛を終息させるべく、形式的には西園寺氏に「見参の礼」を取って臣従しました[33][13]。西園寺氏はこれら在地領主に対し、本領安堵（所領の保証）や知行の宛行い、軍役負担の取り決めな

ど大名的な施策を本格的に行った例は少ないものの [34]、事実上は宇和郡内の**盟主**として振る舞い、一種の「小規模な戦国大名」の性格を備えていたと評価されています [11] [35]。

近隣勢力との抗争　公家の代における最大の軍事上の課題は、東隣の**宇都宮豊綱（うつのみや とよつな）**が治める喜多郡との境界紛争でした。宇都宮氏もまた土佐国の一条氏や豊後国の大友氏と結んで勢力を拡大しつつあり、宇和・喜多の国境地帯では小競り合いが頻発しました [36] [37]。公家の名を伝える具体的な合戦記録は残っていませんが、先述のように天文初期には宇都宮氏が有力大名と提携して圧力を強めたため、西園寺氏は土佐の一条房基（いちじょう　ふさもと）や周防の大内義隆ら遠隔地の大名と結んで対抗しようとしたと考えられます [36] [38]。一条房基は土佐一条氏の当主で、公家の妹婿・公宣の妻の弟にあたる人物でした。この縁もあってか、西園寺氏と土佐一条氏は協調関係にあり、豊後大友氏を介した同盟網の中に組み込まれていました [39] [38]。しかし大内氏の滅亡（1551年）以降、毛利氏が台頭すると周辺情勢は一変し、河野氏・毛利氏・大友氏・一条氏などが宇和郡の争いに介入する混戦状態となっていきます [40]。公家の存命中である天文年間後半までは、まだ宇和郡で大規模な侵攻戦は起きていませんでしたが、その死後の永禄期には宇都宮氏と土佐一条氏の決裂や長宗我部氏の勢力拡大などにより、宇和・喜多の戦乱は激化していきました [41] [42]。公家が蒔いた周辺諸勢力との外交関係は、息子の実充の代に引き継がれ、永禄年間には西園寺氏も将軍・足利義輝や義昭の就任祝いに太刀や馬を献上するなど、幕府とのつながりを保ちつつ生き残りを図っています [43] [44]。これは公家の頃から続く西園寺氏の生存戦略が結実したもので、結果的に公家の死後も宇和西園寺氏は約半世紀にわたり南予一帯で一定の独立性を維持することになりました。

寺社や他豪族との関係

寺社との関わり　西園寺氏は宇和郡内外の寺社とも関係を築きました。南北朝期の永和年間（1370年代）、西園寺一族が宇和郡に下向した際には、その動機を伝える史料として伊予国大洲の**歯長寺縁起**が残ります。そこには「永和年中、西園寺御方、御所へ当国静謐（じょうびつ）のため、御下向」とあり、公家の曾祖父にあたる西園寺公良（きんよし）らが伊予国の治安回復のため現地入りしたことが記されています [5]。また、南朝方についた新居氏の氏寺である**観音寺**（愛媛県新居浜市）には、正平15年（1360年）付の西園寺氏発給文書（国宣）が現存しています [45]。この文書は当時の西園寺氏当主・公重（きんしげ）が「辺土」（四国の海辺の地）で没したと『師守記』に記される直後のもので、宇和郡に下向した西園寺氏が南朝方として在地支配に関与していたことを示す貴重な史料です [45]。公家自身の時代にも寺院への関与が見られ、宇和郡の**明石寺（めいせきじ）**（四国八十八箇所霊場第43番札所）とは特に深い関係を築きました。明石寺第35世の法印・尊栄は公家の子・実充の娘を妻に迎えており（西園寺氏が尊栄と姻戚関係を結んだ）、これ以後明石寺は西園寺氏一門である「明石家」による世襲的管理となったと伝えられます [46]。西園寺氏は明石寺を保護するとともに、いざという時には尊栄法印を味方に引き入れて合戦に参加させる算段であったといい、実際に明石寺のある山には砦も築かれました [47]。このように在地豪族と寺社が婚姻を通じて結ぶネットワークは、戦国期の地方支配の特色の一つでした。公家もまた宇和郡内の神社仏閣に対し寄進や庇護を行っていたと考えられます（例えば熊野信仰系の三間庄の神社再建に関与したとの記録が残る）。

他豪族との関係　前述のように、公家は土佐一条氏との間に縁組を結び、豊後大友氏や安芸毛利氏・伊予守護河野氏など周囲の大名とも状況に応じて同盟・敵対関係を結びました。特に同じ伊予国人の宇都宮氏とは、一進一退の抗争を通じて互いに勢力圏を保ち合う関係でした。永正・大永期には一時的に和睦も成立し、河野氏の調停で領土紛争が収められた例があります [48]。しかし根本的な対立は解消せず、公家死去後の弘治2年（1556年）に再燃した争いでは、西園寺方の当主（実充の嫡男・公高）が宇都宮勢の奇襲を受けて討たれる事態となりました [17]。この戦い（飛鳥井坂の戦い）は西園寺氏に大きな打撃を与えましたが、その後、公家の娘婿でもある河野通宣の仲介で宇都宮豊綱と和議を結び、なんとか家の存続を図りました [48]。公家の築いた婚姻・同盟ネットワークは辛くも西園寺氏を滅亡から繋ぎ止め、その後も西園寺氏は長宗我部元親の侵攻まで宇和郡を支配し続けることになります [49] [50]。

史料上の初見・墓所

史料上の初出　西園寺公家個人の名が確認できる一次史料は極めて限られています。松葉西園寺家当主「公家」の名が明記された文書は見当たりませんが、前後世代の動向から公家の活動を推測することができます。前述した**「管見記」永享10年（1438年）条**には「宇和荘の立間中将公広（＝立間西園寺公広、戦国期の公広とは別人）」と「松葉熊満（のちに教右と改名）」が所領争いの仲裁のため上洛したとの記録があり、当時すでに松葉西園寺家と立間西園寺家の確執が露見しています [51]。この「松葉教右（熊満）」が公家の祖父または曾祖父にあたる人物で、教右の没後に松葉家督は公季〜公家へと継承されたとみられます [52]。公家自身の治世に関する直接の記事は史料上確認されませんが、**『公卿補任』永正17年（1520年）5月条**に「権中納言西園寺実宣（当時25歳）伊予国下向」とあるのが、公家在世中の出来事として注目されます [53]。実宣卿の下向は前述の通り宇和荘の経営に関わるものですが、この時公家は現地の受け入れ側当主として実宣を支えた可能性があります。なお、公家の名は公家自身の死後も系図類に散見され、江戸時代の軍記物『清良記』や幕末の地誌にも「西園寺公家」の名が伝承的に記されています。ただしそれら後世史料には事実誤認も多く、注意が必要です。

墓所・顕彰　西園寺公家の具体的な墓所は定かではありません。宇和島市三間町則祐にある「西園寺宣久の墓」（宇和島市指定史跡）が、公家の子孫である西園寺宣久の墓塔として現存しています [54]。公家自身も晩年を過ごした黒瀬城（西予市宇和町卯之町）の近辺に葬られた可能性がありますが、現在確認できる墓碑はありません。愛媛県西予市宇和町卯之町の光教寺には、公家の孫にあたる西園寺公広の木像と墓所が残されており [55] [56]、その傍らに公家や実充ら歴代当主を合祀した供養塔が存在するとも伝えられます。西予市宇和町では西園寺氏の歴史が郷土文化財として顕彰されており、公家の名も含め紹介がなされています（西予市教育委員会発行『文化財だより』など） [57]。

同時代の他人物との混同について

西園寺公家と同じ「西園寺氏」の人物には、同時代・近世期に活躍した似た名前の者が複数存在するため注意が必要です。まず、公家と**西園寺公広（さいおんじ　きんひろ）**は別人です。公広は公家の孫世代にあたる武将で、天文6年（1537年）に公宣の子として生まれ、のちに公家の子・実充の婿養子となって伊予西園寺氏当主を継いだ人物です [27]。公広は長宗我部元親の四国侵攻に抵抗しましたが、天正13年（1585年）に降伏し、さらに天正15年（1587年）に豊臣方の新領主・戸田勝隆に謀殺されて果てました [49] [58]。公家の死去はそれより約半世紀も前のことであり、両者は時代も経歴も異なります。同様に**西園寺公高（さいおんじ　きんたか）**とも混同してはなりません。公高は公家の嫡孫（実充の嫡男）で、天文7年（1538年）生まれですが、弘治2年（1556年）に宇都宮氏との合戦で戦死した人物です [17]。公家は公高が生まれる以前に亡くなっており、直接面識はありません。公高の戦死によって公家直系の男系は途絶え、公家の血を引く西園寺氏当主は以後、公宣の子である公広へと受け継がれました [27]。なお、公家と同時代に伊予に下向した**西園寺実宣（さねのぶ）**は前述の通り京都西園寺家の公卿であり、公家と同族ではありますが別人格です（実宣は天文10年（1541年）に薨去 [19]）。このように、西園寺公家の事績を論じる際は、戦国期の他の西園寺氏（公広、公高、実宣など）との取り違えに留意する必要があります。

脚注・出典一覧（引用）

- 【3】『信長の野望・蒼天録』武将ファイル（Mixiコミュニティ）より「西園寺○○」の項目（ウェブ上の引用） [59] [3]
- 【4】 Wikipedia: 「伊予西園寺氏」 [1] [60]
- 【5】 愛媛県史 古代Ⅱ・中世（昭和59年）第二編第四章第二節「二　西園寺氏と宇和郡」 [5] [31]
- 【6】 Wikipedia: 「伊予西園寺氏」（南北朝〜室町期の記述部分） [45] [52]
- 【8】 宇和島市公式HP: 市指定文化財「西園寺宣久の墓」説明 [54]
- 【9】 Wikipedia: 「西園寺実充」（経歴・系譜） [23] [48]
- 【10】 Wikipedia: 「西園寺実宣」（経歴） [18] [19]

- 【13】 Reichsarchiv「西園寺家（伊予西園寺家） 系譜」 21 61
- 【18】 愛媛県史 古代Ⅱ・中世（昭和59年）第四章第四節「二　南予の戦雲」 11 15
- 【19】 黒瀬城跡案内（城郭放浪記 他） 9 10
- 【24】 学友塾歴史探索部ブログ「明石寺・尊栄法印と西園寺氏」 47 46
- 【25】 愛媛県史 古代Ⅱ・中世（昭和59年）第四章第四節（付録部） 39
- 【27】 西予市教育委員会『文化財だより』第○号「西園寺氏による宇和郡の支配」 57 62
- 【28】 Wikipedia: 「西園寺公広」（概要・生涯） 55 27
- 【30】 Wikipedia日本語版（中国語版翻訳）: 「西園寺公高」 17 63

---

1 45 49 50 51 52 53 58 60 伊予西園寺氏 - Wikipedia
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BC%8A%E4%BA%88%E8%A5%BF%E5%9C%92%E5%AF%BA%E6%B0%8F

2 59 『信長の野望蒼天録』武将総覧 - 火間虫入道
http://hima.que.ne.jp/souten/data/soutendata.cgi?equal1=3D07

3 57 62 西園寺氏による宇和郡の支配 - 西予市
https://www.city.seiyo.ehime.jp/miryoku/seiyoshibunkazai/bunkazai/dayori/16215.html

4 5 6 12 13 14 31 32 33 データベース『えひめの記憶』｜生涯学習情報提供システム
https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:2/62/view/7850

7 『信長の野望蒼天録』武将総覧 - 火間虫入道
http://hima.que.ne.jp/souten/data/soutendata.cgi?equal20=6900

8 10 黒瀬城・岡城 松葉城・古城 三滝城 余湖
http://otakeya.in.coocan.jp/ehime/seiyuosi01.htm

9 伊予 黒瀬城[縄張図あり]-城郭放浪記
https://www.hb.pei.jp/shiro/iyo/kurose-jyo/

11 15 16 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 データベース『えひめの記憶』｜生涯学習情報提供システム
https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:2/62/view/7858

17 63 西園寺公高 - 維基百科，自由的百科全書
https://zh.wikipedia.org/zh-hant/%E8%A5%BF%E5%9C%92%E5%AF%BA%E5%85%AC%E9%AB%98

18 19 西園寺実宣 - Wikipedia
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E5%9C%92%E5%AF%BA%E5%AE%9F%E5%AE%A3

20 23 24 28 30 48 西園寺実充 - Wikipedia
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E5%9C%92%E5%AF%BA%E5%AE%9F%E5%85%85

21 22 25 61 西園寺家（伊予西園寺家） ― Reichsarchiv ～世界帝王事典～
https://reichsarchiv.jp/
%E5%AE%B6%E7%B3%BB%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88/%E8%A5%BF%E5%9C%92%E5%AF%BA%E5%AE%B6%EF%BC%88%E4%BC%8

26 27 29 55 56 西園寺公広 - Wikipedia
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E5%9C%92%E5%AF%BA%E5%85%AC%E5%BA%83

46 四国霊場 *** 第43番 明石寺 ***
http://www.shikoku-net.co.jp/88/8843.htm

47 明石寺、明石寺本城、池禅尼の供養塔 - 学友塾 歴史探索部
https://rekishi0606.wordpress.com/
2021/05/16/%E6%98%8E%E7%9F%B3%E5%AF%BA%E3%80%81%E6%98%8E%E7%9F%B3%E5%AF%BA%E6%9C%AC%E5%9F%8E%E3%80%81%E

54 市指定 西園寺宣久の墓 - 宇和島市ホームページ ｜ 四国・愛媛 伊達十 ...
https://www.city.uwajima.ehime.jp/site/sizen-bunka/106saionnjibo.html